

芥川龍之介 「西方の人」注解(四)

R. Akutagawa's "SAIHŌ NO HITO" Explanatory Notes (IV)

吉田孝次郎
中野恵海

21 故郷

① 「豫言者は故郷に入れられず。」——それは或はクリストには第一の十字架だつたかも知れない。彼は畢には全ユダヤを故郷としなければならなかつた。汽車や自動車や汽船や飛行機は今日ではあらゆるクリストに世界中を故郷にしてゐる。勿論又あらゆるクリストは故郷に入れられなかつたのに違ひない。現にポオを入れたものはアメリカではないフランスだつた。

(注)

① 「予言者は……」 「マタイ伝第十三章57節」に「イエス彼等に曰けるは其故土其家の外に於て尊まれざることなし」とある。

② あらゆるクリスト 預言者。天才的預言者、文学者を意味するだ

「西方の人」注釈(四)

ろう。そしてポオをその一人に数えているところから、芥川はイエスキリストを天才的文学者になぞらえていることがわかる。

③ ポオ Edgar Allan Poe (1809~49)

アメリカの詩人、小説家。十九世紀アメリカのあらゆる文学流派や傾向からとび離れた孤絶の場所で、近代の新しい美と戦慄を創造しながら、一世紀近く英語国民に正当には認められず、ひとたび認められると、その人氣は高まり、同時に、多くのすぐれた批評家や作家に持続的な影響力を与えつづけるという悲惨と栄光にみちた作家。

(解)

「予言者(神の声、すなわち真理・真実を直言する人)は故郷に喜ばれない。」(「という意味のことをクリストが言っている。せっかくの伝道も郷里の人々から「あれは大工の子ではないか」とか「その家

族だつてわたしたちとちがわないではないか」と、問題にもされなかつた時のことである。「これはクリストにとって最初の十字架(受難)」だったかも知れない。「こうして」彼はついには全ユダヤを「彼を排斥する」故郷にしなければならなくなった。汽車、自動車、汽船、飛行機などの交通機関の発達は「世界をせばめ」今日ではすべてのクリスト「的天才」に対して世界中を「故郷」にしている。実際ポオを迎え入れたのは「彼が生れた」アメリカではなくてフランスだった。

(要旨)

「郷に入つては郷に従え」ということわざがあつて、地方にはその土地特有の人情や習慣というものがあり、それに順応しない者はその土地にうけいれられない。ましてその氏素姓が芳しくないものであれば、それをよく知る郷里では、ねたみそねみも加わつて一層強く排斥されることになる。神の言葉——絶対の真理を周囲と妥協せずに説くクリストが故郷から追われずにすまなかつた訳である。交通・通信の機関が発達して、この故郷の地域は広まり、世界は狭まる一方で、今日ではすべてのクリスト(天才)にとつて、排斥されないうで生きる余地がなくなつてゐる。つまり物質文明の高度の発達は高貴な文化的天才の生存を不可能にしてしまつてゐる。今や、真の文化の時代はすぎ、平凡な人間だけが苔のようにはびこる(統篇16章参照)愚かな情ない時代なのだという芥川の痛歎がよみとられ、そこに生存の意義の否定に傾いてゐる彼の内面がうかがわれよう。

22 詩

人

クリストは一本の百合の花を「ソロモンの栄華の極みの時」よりも更に美しいと感じてゐる。(尤も彼の弟子たちの中にも彼ほど百合の花の美しさに恍惚としたものはなかつたのであらう。)しかし弟子たちと話し合ふ時には会話上の礼節を破つても、野蛮なことを言ふのを憚らなかつた。——「凡そ外より人に入るものの人を汚し能はざる事を知らざる乎。そは心に入らず、腹に入りて厠に遺す。すなはち食ふ所のもの潔れり。」……

(注)

- ①「ソロモンの栄華……」 「マタイ伝第六章29節」に「われなんぢらに告げんソロモンの栄華の極の時だにも其装この花の一に及ざりき」とある。
- ②馬可伝第七章18・19節に「凡そ外より人に入るものの人を汚し能はざる事を知らざる乎そはその心に入らず腹に入て厠に遺すなはち食ふ所のもの潔れり」とある。「厠に遺す」と讀んだのは芥川の誤読であつて原文は、厠に遺すなはち」とある。

(解)

クリストは一本の百合の花を「ソロモンの栄華の絶頂の時」よりもさらに美しいと感じてゐる。(もっともそれは、クリストは特別

であつて、彼の弟子たちの中にも彼ほど百合の花の美しさにうっとりとなつたものはなかつたであろう。)しかし彼は「これほどの自然美の礼讃者であるのに」弟子たちと話し合うときには会話上の礼儀を破つても平気で「一見」野蛮なことをいつてのけるのだった。——「すべて外から人の中にはいつて来る食物などを汚し得ないことが分らないか。それは人の心の中にはいるのではなく、腹の中にはいり、そして厠かわやに落ちるのである。すなわち食べるものは人の心を汚さない。」……(人の口、すなわち心から出るものこそ人を汚すのである。)

(要旨)

クリストの詩人性を二つの面からとらえている。その一つは、人工的、外発的、装飾的な美の極致も自然的、内発的、本質的な美には及ばないと感じる美感の鋭敏さであり、もう一つは、習慣や常識に感わされないで、真実真相を把握する直観のたしかさである。

このどちらにも、現世の歴史的、社会的性質を否定し、それを越えんとした者の、つまり相対を脱し、絶対を志向した者の生き方が土台となつていゝものであることが考えられるのに注意される。クリストのクリストたる所以を「超えんとするもの」と規定した芥川はクリストの詩人性を彼の言葉にもついで彼の美感の質と、彼の真実凝視との両面から観じ、クリストの詩人たる面目を躍如やくじょたらしめるところに本章の主旨があつたと考えられるが、それにつけても、クリストの言葉を選択する仕方において美感の外に醜をいとわぬ「真」の尊重ぶりを聖書の中に求めたことは、芥川の詩人観を考究する上に逸すべき

ではなからう。

23 ①
ラザロ

クリストはラザロの死を聞いた時、^②今までにない涙を流した。今までにない——或は今まで見せずにゐた涙を、ラザロの死から生き返つたのはかう云ふ彼の感傷主義の爲である。

母のマリアを顧かみなかつた彼はなぜラザロの姉妹たち、——マルタやマリアの前に涙を流したのであらう? この矛盾を理解するものはクリストの——或はあらゆるクリストの天才的利己主義を理解するものである。

(注)

- ①ラザロ ベタニヤのラザロ。イエスの友人。
- ②今までにない涙を流した…… ヨハネ伝第十一章33章—36章に「イエスマリアの哭なげと彼と偕ともに來しユダヤ人の泣なを見て心を慟いたましめ身みふるひて曰いけるはなんぢら何処いづこに彼を置おしや彼等かれらいひけるは主よ來りて觀みたまへ、イエス涕なみだを流ながしたまへり、是こゝに於おてユダヤ人びといひけるは見よ如何いかばかり彼を愛する者ものぞ」とある。
- ③母のマリアを顧かみなかつた…… 「17 背徳者」参照

(解)

クリストはラザロの死を聞いたとき、今までにない涙を流した。今

までにない——あるいは「涙を流したことがあるとしても」人に見せずにいた涙を。このラザロが死から生き返ったのはこういう「それまで悲しいことがあっても涙をこらえていた」クリストのよくよくの感傷主義（ひたすら悲哀を感じる心情的傾向）のためである。「17 背徳者」に見られるように「母のマリアに冷たかった彼がなぜラザロの姉妹たち、マルタやマリアの前に涙を流したのであるか？」「矛盾ではないか？」この矛盾を理解するものはクリストの、——あるいはあらゆるクリストの天才的利己主義（利己主義は人間の宿命であるが天才は凡人とちがって自分の天才、自分の道の発展大成のために利己主義を発揮するものであるということ。）を理解するものである。

(要旨)

ヨハネ伝がクリストの奇蹟として記しているラザロの復活について、それはクリストがはじめて涙を見せた「感傷主義」のためであるとの見解をもとに、それと母マリアに示した冷たい態度との間に矛盾を見出すことから天才的利己主義に対する読者の理解を求めている。この章で訴えたかったことは勿論この矛盾をうみ出した天才的利己主義の問題であろうが、この文が、ラザロを生き返らせたものをクリストの「感傷主義」だとする「感傷主義」の肯定から出発しているのが注目される。この「感傷主義」に純情性を内包させているらしいことは「20 エホバ」の結びからも考えられるが、それは文壇最高の知性人と目されていた芥川の最晩年の内面の消息を示すものであり、理知の実践倫理的無力の痛感からひたむきの情熱的な生き方への肯定に大

きく傾いていたことがここにかがえるのである。利己主義は人間の宿命という芥川の理知による人間認識は終生不動であり、クリストもその例外ではなかったが、クリストの場合、その利己が自己内面の絶対化に向って渾身の情熱をもって発揮されるものとし、そしてそれがラザロの生命を生き返らせた原動力でもあると考えさせることで、天才的利己主義が現象上の矛盾を越える崇高なものであることを主張するところにこの章の本意があったと考えられる。

24^① カナの饗宴

クリストは女人を愛したものの、女人と交はることを顧みなかった。それはモハメットの四人の女人たちと交ることを許したのと同じことである。彼等はいづれも一時代を、——或は社会を越えられなかった。しかしそこには何ものよりも自由を愛する彼の心も動いてゐたことは確かである。後代の超人は犬たちの中に假面をかぶることを必要とした。しかしクリストは假面をかぶることも不自由のうちに数へてゐた。所謂「爐邊の幸福」の諺は勿論彼には明らかだったであらう。アメリカのクリスト、——ホキットマンはやはりこの自由を選んだ一人である。我々は彼の詩の中に度たびクリストを感じるであらう。クリストは未だお大笑ひをしたまま、躍り子や花束や楽器に満たしたカナの饗宴を見おろしてゐる。しかし勿論その代りそこには彼の贖はなければならぬ多少の寂しさはあつたことであらう。

(注)

①カナの饗宴きやうえん 「ヨハネ伝」第二章1節〜11節。カナはガリラヤ内の地名。この婚礼に招かれたイエスはかめの水をぶどう酒に変えた。

②四人の女人たちと…… 回教の開祖モハメット (Mohammed) は一夫四妻を認めた。

③超人は大たちの中に假面を…… ニーチェはその著「善悪の彼岸」(1886)の中で、超人は家畜の群れたる凡俗を離れて、強い意志を持って高尚な生を生きるために假面をかぶらねばならないと説いた。

④「爐辺の幸福」 平凡で平和な家庭生活のうちに見いだされる幸福。平凡でささやかな幸福。

⑤ホキットマン Walt Whitman (1819〜92) アメリカの詩人。自由詩の第一人者。下層庶民の希望、感懐を従来の思想道徳、詩形を無視した新しい手法で率直に歌った。詩集「草の葉」。著「民主主義展望」。

⑥未だお…… 未だにの誤りであろう。

(解)

クリストは女性を愛しはしたが、女性と交わることは問題としなかった。それはモハメットが四人の女性たちと交わることを許したのと同じ趣である。彼らはいずれも「一夫多妻の」時代を——あるいはそういう社会を越えられなかった。しかしそのクリストの態度には何よ

りも「大切なものとして」自由を愛する彼の心が働いていたことは確かである。

後代の「ニーチェの説く」超人は「高尚な生き方のために」凡俗の中で「一夫一婦という」假面をかぶらなければならないとした。が、しかし、クリストはその假面をかぶることも一つの不自由としていたのである。「すなわち」いわゆる「炉辺(家庭)の「ささやかな」幸福」の虚偽性はもちろん彼にははっきり分かっていたであろう。アメリカのクリストといえるホイットマンはやはりこの自由を選ん「で独身をたらぬい」た一人である。我々は彼の詩の中にたびたび「自由を尊んだ」クリスト「の面影」を感じるであろう。クリスト「とか、クリストともいうべき人」は今日においてもなお「花嫁花婿のおめでたさに」大笑いをしたまま、踊り子や花束や楽器に満ちた「賑やかな」カナの饗宴を高所から傍観している。が、しかし勿論その代りにその態度には代償として免れない多少の現世的寂しさを伴っていたであろう。

(要旨)

前章でラザロの姉妹にふれたのを受けて、本章ではクリストの生き方を、女性乃至結婚問題にひきつけて考えている。女性を愛した彼がなぜ女性との交わりに無頓着であったかに筆を起こして、それは一夫多妻の時代だったためでもあるが、彼が自由を最も愛していたからであり、後代の超人ニーチェが教えた俗社会で一夫一婦の假面をかぶる生き方もクリストには耐えられない不自由さだった、とする。そして

独身を貫いた自由主義詩人ホイットマンにクリストを見出した芥川は、カナの饗宴へのクリストの臨み方に、ふくみの多い哄笑を見ると同時にその裏に、下界の幸福を犠牲にし、天に向って超え続ける者の寂しさを想像し、そこに古今のクリストの姿勢を観じているのである。

芥川は元來結婚乃至家族制度への悩みや矛盾を訴える方の作家である。(例、「或阿呆の一生」参照)表立って自己に忠実に振舞えない切実な芥川の自己意識がクリストの中に徹底した自由主義を発見させたものであろうが、一面それを自身に想像した場合、又一沫の寂しさを感ずることも疑えない事実であったのである。ここに芥川はクリストに自己を投影して絶対の自由を生きる者の必ずしも軽くない現実的犠牲の問題にふれていることがあわせて注意されるが、さらにそれは次章で深刻に追求されることになる。

25 天に近い山の上の問答

クリストは高い山の上に彼の前に生まれたクリストたち——モオゼやエリアと話をした。それは悪魔と戦ったのよりも更に意味の深い出来事であらう。彼はその何日か前に彼の弟子たちにイエルサレムへ行き、十字架にかかることを豫言してゐた。彼のモオゼやエリヤと會つたのは彼の或精神的危機に行んでゐた證據である。彼の顔は「日の如く輝き其衣は白く光」つたのも必しも二人のクリストたちの彼の前に下つた為ばかりではない。彼は彼の一生の中でも最もこの時は嚴肅だ

つた。彼の伝記作者は彼等の間の問答を記録に残してゐまい。しかし彼の投げつけた問は「我等は如何に生くべき乎」である。クリストの一生は短かつたであらう。が、彼はこの時に、——やつと三十歳に及んだ時に彼の一生の総決算をしなければならぬ苦しみを嘗めてゐた。モオゼはナポレオンも言つたやうに戦略に長じた將軍である。エリアも亦クリストよりも政治的天才に富んでゐたであらう。のみならず今日は昨日ではない。今日ではもう紅海の波も壁のやうに立たなければ、炎の車も天上から来ないのである。クリストは彼等と問答しながら、愈彼の見苦しい死の近づいたのを感じずにはゐられなかつた。天に近い山の上には水のやうに澄んだ日の光の中に岩むらの聳えてゐるだけである。しかし深い谷の底には柘榴や無花果も匂つてゐたであらう。そこには又家々の煙もかすかに立ち昇つてゐたかも知れない。クリストも亦恐らくはかう云ふ下界の人生に懐しさを感ずずにはゐなかつたであらう。しかし彼の道は嫌でも應でも人氣のない天に向つてゐる。彼の誕生を告げた星——或は彼を生んだ精靈は彼に平和を與へようとしなない。「山を下る時イエス彼等(ペテロ、ヤコブ、その兄弟のヨハネ)に命じて人の子の死より甦るまでは汝等の見し事を人に告ぐべからずと言へり。」——天に近い山の上にクリストの彼に先立つた「大いなる死者たち」と話をしたのは實に彼の日記にだけそつと残したいと思ふことだつた。

(注)

① 高い山の上 「マタイ伝第十七章」「マコ伝第九章」

②モオゼ ユダヤ民族の英雄。イスラエル建国の祖。予言者としてイスラエルの民を指導しシナイ山上で十誡を垂れた。

③エリア モオゼにつぐ預言者。

④その何日か前に……「マタイ伝第十六章21節」に「此時よりイエス其弟子に己のエルサレムに往て長老祭司の長学者等より多の苦みを受かつ殺され第三日に甦る、等なすべき事を示し始む。」とある。

⑤「日の如く輝き……」 「マタイ伝第十七章1節2節」に「六日の後イエスペテロヤコブその兄弟ヨハネを伴ひ人を避て高山に登りしが彼等の前にて其容貌かはり其面目の如く輝き其衣は白く光れり」とある。

⑥「るまい」「るない」の誤りであろう。

⑦紅海の波も…… 「出エジプト記第十四章27節」に「モーゼすなはち手を海の上に伸けるに夜明に及びて海もとの勢力にかへりたればエジプト人之に逆ひて逃たりしがエホバエジプト人を海の中に擲ちたまへり。即ち水流反りて戦車と騎兵を覆ひイスラエルの後にしがひて海にいりしパロの軍勢を悉く覆へり一人も遺れる者あらざりき。然どイスラエルの子孫は海の中の乾ける所を歩みしが水はその右左に墻となれり」とある。

⑧炎の車も…… 「列王記下第二章11節」に「彼ら進みながら語れる時火の車と火の馬あらはれて二人を隔てたり。エリヤは大風にのりて天に昇れり」とある。

⑨精霊 普通は聖霊とあるところである。

⑩「山を下る時……」 「マタイ伝第十七章・9節」。

⑪大いなる死者たち モオゼ、エリヤをさす。

(解)

クリストは高い山の上で彼以前のクリスト「ともいうべき天才」たち——モオゼやエリヤと話をした。それは悪魔と戦った事(12章参照)よりもさらに意味深い出来事であろう。彼はその何日か前に弟子たちイエルサレムへ行き十字架にかかることを預言していた。「(こういう)彼がモオゼやエリヤと会ったのは彼が精神的危機に立っていた証拠である。彼の顔が「日のように輝やき、その着衣は白く光」ったのも、なにも「ありがたい」二人のクリストたちが彼の前に下った為ばかりではない。彼の一生のうちでも最もこの時は厳粛だった「(からである)」。彼の伝記作者は「(このときの)彼らの間の問答を記録に残していない。が、彼が二人のクリストに投げかけた問題は「我等いかに生きるべきか」である。クリストの一生は短かったであろう。それなのに——やとと三十才になったばかりだというのに一生の総決算をしなければならぬ苦しみを嘗めていた。モオゼはナポレオンもいったように戦略にすぐれた將軍であり、エリヤもまたクリストよりも政治的天才に富んでいたのである。その上今日とは時代がちがつている。エジプトを脱出するモオゼらの為紅海の波が左右に壁のように分かれて彼らを通し、また炎の車がエリヤを乗せて天上に去ったというが、今日でもそういうことはないのである。「(したがって)クリストはこの二人と問答しながら、いよいよ見苦しいであろうところの自分の死の近づいたのを感じないではいられなかった。「彼が目指

す」天に近い山の上には冷たく澄んだ日光の中に岩むららが聳えているだけで「荒涼たるもので」ある。しかし「彼が超えようとしている下界の」深い谷底には柘榴や無花果も匂っていたであろうし、そこにはまた家々の炊煙もかすかに立ち昇っていたかも知れない。「死を控えて」クリストもまたおそらくはこういう下界の人生に「これまでではそれを超えようとしていたのであるのに」懐しきを感じずにはすまなかつたであろう。しかし彼の進んで来た道は退きもひきも出来ない処まで来てしまっていて「それは」人気が感じさせない「茫茫たる」天に向かっている。彼の誕生を告げた星(第7章参照。生まれながらの彼の宿命の意)は——あるいは彼を生んだ聖霊は、彼に「地上の」平和を与えようとはしない。「山を下る時イエス彼ら(ペテロ、ヤコブその兄弟のヨハネ)に命じて人の子の死より蘇えるまでは汝らの見しことを人に告ぐべからずと云へり。」——天上に近い山の上でクリストが彼に先行した「偉大なる死者たち」(モオゼやエリヤ)と話をした「この」事は実に自分の日記にだけそつと書き残したいと思う「人に知られたくない」ことだった。

(要旨)

十字架にかかることを予知したクリストが高い山の上でモオゼやエリヤと交した話の内容について聖書は何も記していない。(ルカ伝が第9章31節でイエルサレムでの死について語ったと記しているだけである。)

死を決意していた芥川は、ここにクリストの内面に自己の眞実を投

影する場を見出すことによって、そこに、精神的危機(動揺・分裂の危機)に立ち、一生の中で最も厳粛であったクリストを觀じ、三十才になつたばかりで、(芥川は三十五才になつたばかりで、)一生の総決算をしなければならぬ苦惱から、「我らはいかに生くべきか」を(クリストの)二人の大先達に問わずにいられなかつたのだと会話の中味を(芥川は)あえて断定する筆に出ているのである。これを、クリストの大試練といわれている悪魔との問答の方を「クリストの一生では必ずしも大事件といふことはできない。」(第12章)としていた芥川は「悪魔と戦つたのよりもさらに意味の深い出来事」とし、聖書では別段に問題になつていない場面に敢えて自己の推断を下し、これほどの意味を力説している。それというのは、この「いかに生くべきか」が実は、芥川の最後まで続いた一生の、そして最大の問題であつたことによるものである、ことが考えられてよいであろう。

この問題を本章に即して考えてみると、超えんとする己が生の完成の為に一切を犠牲にして来たクリストが、死期を目前にして、下界の生(マリア的、守らんとするもの)に今更ながら強く心ひかれずにはいられない、という深刻なジレンマに苦しむ、その煩悶、その動揺である。我々には上記のようにモオゼやエリヤと会つたクリストの必然性をかく断定し、その苦惱と、苦惱の秘匿を願う心とを上記のように表現せずにいられなかつたその底に芥川最晩年の眞実がひめられていられるのである。

26 幼な児の如く

クリストの教へた逆説の一つは「我まことに汝等に告げん。若し改めて幼な児の如くならずば天国に入ることを得じ」である。この言葉は少しも感傷主義的ではない。クリストはこの言葉の中に彼自身の誰よりも幼な児に近いことを現してゐる。同時に又精霊の子供だった彼自身の立ち場を明らかにしてゐる。ゲエテは彼の「タツソオ」の中にやはり精霊の子供だった彼自身の苦しみを救ひあげた。「幼な児の如くあること」は幼稚園時代にかへることである。クリストの言葉に従へば、誰かの保護を受けなければ、人生に堪へないものの外は黄金の門に入ることは出来ない。そこには又世間智に対する彼の軽蔑も忍びこんでゐる。彼の弟子たちに正直に、「幼な児を前にしたクリストの凶の我々に不快を与へるのは後代の偽善的感傷主義の爲である。」彼の前に立つた幼な児に驚かない訳には行かなかつたであらう。

(注)

- ①「我まことに……」 「マタイ伝第十八章1節〜4節」に「其とき弟子イエスに来て曰けるは天国に於て大なる者は誰ぞやイエス嬰兒を召かれらの中に立て曰けるは我まことに爾曹に告んもし改まりて嬰兒の若くならずば天国に入ることを得じ然ば凡そこの嬰兒の若く自ら謙る者はこれ天国に於て大なる者なり」とある。

- ② 精霊 聖霊の誤りであろう。

「西方の人」注釈(四)

④「タツソオ」 Tasso (1789) ゲーテの円熟期をかざる戯曲。タツソオの史実を借りて夢と現実との間に動揺する詩人の苦悩を表現。幼児のような魂をもつ天才が俗世間に対した時の悲劇。

⑤ 救ひ 歌ひの誤りであろう。

⑥ 幼な児を前に…… 「マタイ伝第十九章13・14節」に「其とき人々イエスの手を按て祈らんことを求ひ嬰兒を彼に携来りければ弟子是を阻たりイエス曰けるは嬰兒を容せ我に來ることを禁しむる忽れ天国にをる者は此の如き者なり」とある。

(解)

クリストの教えた逆説(矛盾に装われた真理)の一つは「我まことに汝らに告げん。もし幼な児のごとくならずば天国に入ることを得じ」である。「我まことに汝らに告げん」とクリストが自己の真実を吐露した。この言葉は少しも心情の悲哀的傾斜を帯びていない。クリストはこの「確たる信念に発した」言葉によって彼自身が誰よりも幼な児に近い「心の持主である」ことを現わしている。同時にまた聖霊の子供として生まれた「純粹一途に生きる」立場を明らかにしてゐる。ゲエテは彼の作品「タツソオ」のうちにやはり聖霊の子供だった彼自身の苦しみを歌い上げた。

「幼な児のごとくあること」は幼稚園時代にかへることである。「だからこの」クリストの言葉に従うとすると、「大人でも」誰かの保護を受けなければ生きて行けない「という生活力のない」人でなければ天国に入れない「訳である」。この言葉には「純真なるものの尊さ

を教える一面」また「打算保身に抜け目ない」世渡りの智慧に対する彼の軽蔑もひそんでいる「のだ」。「それを理解しない」彼の弟子たちはバカ正直に「うけとり」(幼な児を前に配したクリストの絵が我々を不快にするのは後代の、いい気になって感傷を装うこと「への反感」のためである。)クリストの前に立っていた幼な児を見て「いままさ、こういう幼な児になればとアツケにとられ」驚かないわけにはいかなかったであろう。

(要旨)

「幼な児のごとくならずば天国に入ることを得じ」をクリストの逆説の一つとする芥川がこの言葉の真理性を肯定しているのはもちろんであるが、それはこの言葉がすこしも感傷主義的でないことから説き起こしている。第23章ではクリストの涙の感傷主義を肯定しているが、思想的には感傷性から離れているところに、そしてまたクリスト自身がその言葉通りに超俗純真という聖霊の子としての立場を明らかにしているところに、この言葉の意義を認め、さらにこの逆説の真理性を非現実、反俗の側面からつぎのように考える。幼な児のように純な魂の所有者の悲劇はゲエテも書いているが、クリストが天国に入れるのは誰かの保護なしには生活できない人だけとした裏には醜い俗才への軽蔑をひそませているのだが、それをくみとれないで、ただクリストと幼な児とをとり合わせて、弟子たちは戸惑い驚き、後代の俗物は感涙を装おうとはあまりにも情ない。卑近な比喩にぬきんでいたクリスト(第19章参照)は、自分に近寄ろうとして弟子たちに制止さ

れていた幼な児に托して教えた純真の尊さが、弟子たちにも後代にもそれが通じていないことを歎くとともに、現実生活で純真を得るのは幼な児に立ち返るのと同様不可能であることを認めながら、むしろそれの故に一層、その尊さと美しさとはゆるがないものとなり、クリストのこの逆説の貴重さを、それを理解しない人間の愚かさとともに、あえて書き遺したものであろう。

(短大国文学科 教授)